なければまずはGPを受診、これがオーストラリアの常識だ。だからGPは、妊婦、乳幼児、小児から成人老人、さらには精神疾患や緩和医療まで幅広い分野をカバーする能力が必要とされる。つまりGPとは、患者を総合的に診ることのできる「専門医」なのだ。

GPは専門医療や高度医療のゲートキーパーの役割も担っている。たとえば、日本では当たり前の専門医直接受診は、ここオーストラリアでは不可能であり、患者はたとえ眼に問題があろうともまずはGPを受診しなければならない。その上で、GPが眼科受診の必要ありと認めたときだけ紹介となるわけだ。ただし患者にとっては二度手間となり、専門医の予約の取りにくさを考えると、かなりの時間と労力の浪費になる。必要な医療へのアクセスビリティーという点では日本に劣っているだろう。どこも一長一短だ。

卒後25年のうち10年間は医療現場を離れた「フーテン生活」をしていたおかげで、なんだかややこしい人生となってしまったが、これからはできるだけ大人しく、南半球の大陸の片隅でGPとして地域社会に貢献していきたいと思っている。ちなみに日本の医師免許も持っているので、桜の時期などにバイトに行くっていう手もあるなと、やはりまだフーテン的気質が払拭し切れていないところはまあよしとしよう。

「25年医師をやってきて良かったこと・いい思い出」

琉球大学大学院医学研究科整形外科学講座　助教
普天間　朝　上

琉球大学医学部整形外科の普天間です。同期で大学に残っているのは私だけのようで、そのため御指名をいただきました。卒後25年経ちますがそのうち24年間も大学にいます。大学に居て良かったことは何？

① **夏休みが２週間もらえたこと**：今はそうでないかもしれないが、入局当時は一般病院では３日程度しかもらえなかった。

② **当直が少ない**：医局員が多いため

③ **高度医療技術が身についた**：琉大の手外科は日本でもトップクラスの実力であり、その恩恵を受けた。

④ **③のため一般病院や開業医から頼りにされる**：信頼されて患者を紹介されるのは非常にうれしいし、名誉なことだ。

⑤ **座長、講演、手術を依頼される**：他府県からの依頼もあり。先日、日本手外科学会の春期講習会の演者の一人に指名された。教授など名だたる演者に交じって講演したが、本当に私で良かったのだろうか　と自信がなかった。講習会後のアンケートで「わかりやすかった」「すぐに実践に役立ちそう」などのコメントをいただきやってよかったと安堵した。

⑥ **Best　Doctor（専門医が推薦する専門医）に選出された**：これは教授をはじめ、先輩、後輩に育ててもらったおかげと思います。信頼されている証ですね。

⑦ **患者より感謝の言葉をかけてもらったこと**：これは大学でなくともありますが、感謝され、頼りにされることは医者冥利につきます。

2004年から始まったスーパーローテートに伴い、初期研修として大学は、雑用が多い、封建的、賃金が安いなどのため敬遠されています。が、スキルをアップするには、大学は良いところです。一度は大学の門を叩いても損はないと思いますよ。

「25年医師をやってきて良かったこと・いい思い出」

今井内科医院　院長
今　井　千　春

３期生の今井千春です。平成元年に琉大を卒業したのがつい昨日の事のように思えますが、気がつけば25年が経過していました。今は琉大東口近くで内科を開業し、毎日を楽しく過ごしています。大学生時代のマージャン友達のご子息とうちの娘が二代に渡り同級生になったりと、月日の流れを感じさせる出来事が多々あります。

まだまだ若者気分で過去を振り返るのには早い気がしますが、この25年間で良かったことを挙げると、この沖縄で医師を続けて来れた事があります。今では気候も人も温かく穏やかな沖縄への移住が人気ですが、新潟生まれで沖縄とは縁もゆかりも無かった高校生だった自分が「琉球大学医学部に入学しよう」と決断したことは、我ながら良い選択だったと思います。

次に良かった事は卒業後第三内科に入局し、循環器内科医となったことです。不器用なので学生の頃から外科系は無理と思っていました。内科系ではいろいろな選択肢がありましたが、開業後の今でも循環器関連の外来は楽しく、循環器内科で良かったと思います。循環器学会、内科学会に参加して感じることですが、循環器学会では自分に似た雰囲気の医師が多く、逆に内科学会では少な